

保健・体育教育（保健）

子どもの実態から出発し、発達への願いを受けとめ、子どもたちに安心と信頼を育む養護教諭の感性に学ぶ

種市 倫江

はじめに

基調提案の教育をとりまく情勢に「生きづらさ」を抱えている若者たちの姿とその深刻さが記された。保健室から見えて来るようすも記された。家には湿布がない。かなり気になる症状でも病院へ行かない（行けない）。むし歯は放置等。

貧困と格差拡大は、子どもと教育現場に深刻な影響をもたらしている。

私たちは今まで、子どもの心の機微の変化に寄りそいながら、継続的に関わることを大切にしてきた。そしてそこ

でつかんだ心と体の事実を出発点に、教育としての健康診断や個を中心としたさまざまな保健室実践を報告し合い、交流とあわせて養護教諭としての教育実践のあり方とその構築を進めてきた。

その意味で各地からの報告は、それそのものが財産である。

ここ数年その報告が少なくなってきた。しかし憂うことはない。今回のレポートは3本であるが、その報告は見事に人間賛歌を謳い、学校とは何かを突きつけていた。そこにつづられた内容は、おし進められる競争と管理の教育、教職員の創造性や学校の自律性を著しく制約している教育現場だからこそ、本当の教育を問い続ける、その現れである。

養護教諭の子の発達を願う思いは、本当の学校、基礎学力と人間的な成長を保障するための学校づくりにつながっている。

討論に参加した小中高特別支援の養護教諭たちの、子どもたちの苦悩に応えようとする姿や、子どもを発達の主体者としてしっかりと見つめる姿、だからこそ健やかな成長発達を願う中で生まれてきた実践を、参加者の発言を通して紹介したい。

一 (共通) 実践報告と討議から

1 『保健室からできること』模索中の毎日〜』

根室市立〇〇中学校 大〇〇美

今年初めて移動を経験した大〇さん。

喫煙や対教師暴力、ケータイを持ち歩く子どもたち：一枚の掲示物も貼られていない（貼ることができない）保健室。そんな引き継ぎをしながら、手探りで保健室づくりが始まった。レポートには、わずか半年あまりの保健室の変化が淡々とつづられている。

この報告を受けた参加者たちは、短期間で大〇さんが子どもたちのさまざまな不安の表出・いらだちをガツチリと受けとめ、子どもたちは何を求めているのかを模索する、その真摯な姿に深い感動を受けた。併せて、だからこそ学びの意義の再認識を組織づくるための学校のあり様や、教職員集団としての子どもの方角を、子どものおかれている現実から出発する要としての大〇さんの今後の健闘に賛辞を送った。

赴任一日目から始まったバトル？。たくさんの子どもたちに振り回され、どうにもならない現状に辛さを感じる。

でも保健室に来る子どもたち。保健室の外では、居場所を求めて校内をさまよっている子どもたちもいる。そんな子どもたちの観察から、子どもの素顔を発見することになる。教室には入れない・入らない子どもたちの多くは、人なつこく裏表のない、感情表現が素直、行事に熱くなり、盛り上げることのできる：パワーを持った子どもたちだ、と実感する。

校舎は広く空き教室がある。隠れようと思えば、たくさんの空間がある。保健室は特に行かなくてもいい場所でもあるはずなのに、あえて来るといふ意味は。大〇さんは「あえて保健室に来る子どもたち」が貴重な存在と捉える。

その子どもたち一人ひとりに、当たり前前の、最低限のルールをいい続け、授業への促しも欠かさない。

いま、保健室でのルールが少しずつできあがりつつある。と同時に子ども一人ひとりのおかれている辛い・悲しい現実を直視することになる。

質問を交えながらの討論の中、子ども同士の力関係をどうつくりあげていくか、部活動での方針の再確認が、生徒理解のための心理テストの活用は等々、子どものもつ可能性に、しっかりと応じる学校体制づくりの指針となる具体的な方策が次々と紹介された。

最後に、「同じ方向に向かうその方法とは、子どものこ

とを話せる教職員集団づくりである」と。確かに受容することと厳しくすることをめぐっての合意形成の難しさは、事実としてある。しかし、いま保健室が学校の中で落ち着ける・安らげる場所になっていることを、その事実を一般化していくことは、今後の教師集団づくりにおける有効な手段となるのではないか。これからの学校の変容に期待を持ちながら討議が終了した。

二 (分散会) 実践報告と討議から

1 保健室からの共同の学校づくりを考える

大〇レポートを基に保健室からの発信・その手だてを学びあうことにした。

保健室で真正面から向き合う大〇さんからたくさん悩みが出された。しかしそれは悩みではなく、私たち養護教諭に求められている、子どもの健康権・学習権を保障していくための保健室づくり・学校づくりへの積極的な期待からであった。

いま保健室に「生きる」という谷川俊太郎編集の本が置いてある。その本に目を通す子どもたち。その後、自分の思いをつづる子どもがはじめている。

「生きる」という本の存在は、子どもの背景を察する物となり、揺れる子どもたちの心に、普通へのあこがれを理解させることになる。まだ挑発的なことばにキバを向ける子どもたちではあるが、その子の行為の意味を理解することを抜きにして、関わることはできない。

見捨てられることが当たり前で自暴自棄に近い感情で保健室を訪れる子どもたちを、待つ・寄りそうという表現でいま支えている大〇さん。

一方、荒れる子どもたちを「迷惑だ」と排除する子どもたちがいる。素直に授業を受けた子どもたちもいる。

討議は、思春期の子どもたちゆえ、揺れる子どもたちの思いを、大切なクラスの仲間としての存在を、普通へのあこがれを見出し始めているからこそ、保健室から発信できないだろうか、という方向に向かった。大きな課題ではあるが、4月の保健室と違ういまの保健室を明らかにしながら、本物の学びを求めている姿とその組織化を願いながら、自らができる方法でやってみようという提起が確認された。本物の友だちを求め、孤立することを恐れている子どもたちだからこそ、子どもとの対話を軸に子ども同士の対話へつなげていきたい。子どもが子どもとして生きる、そんな学校への願いを改めて強くした。

2 自分の体と生活を見つめられる力を育もう

〔生活習慣の改善を柱に保健指導を作る〕

宗谷 ○○小学校 木○○ ○紀

子どもたちの住む地域のみなさんへ、子どもを元気にする「生活リズム」に変えていきましょう！とダイナミックに呼びかける木○○さん。その裏づけとしての細やかなデーターを基に、その学校ならではの保健指導がしっかりと作られている。

今時の子ども事情は深刻だ。夜型の生活、少年団活動、排便が不定期等々。赴任早々、子どもたちの自分の体や生活に対する意識の低さを感じ、いま子どもたちに起きている現象は、体からの訴えであり、体に責任を持つ養護教諭として何ができるのかを生活リズムから探り出す。まさに養護教諭の力の発揮どころ。

自分の体の主人公は自分だ、ということを通して実感させるための、調査を活用しての日々の営みをつくり出す。今時の生活習慣に着目し、学校体制等を考慮しながら、また保護者の困り感に寄りそいながら、そして地域社会への働きかけをも視野に入れる。実を射たきめ細かな取り組みが紹介された。

保健指導の資料に保健だよりを活用した。児童向けは、

低と高に分けた。担任が短い時間でポイントをしぼって指導できるようにと工夫が施される。保護者への保健だよりは、月に1〜2回。教職員向けは月1回。保健だよりは間接的な方法だが、大事にしたいこと・伝えたいことをコツコツ伝えることができる。伝えることで児童・保護者・教職員の意識が変わり、学校での取り組みに対する理解も得られやすくなる、と木○○さんは語る。

宗谷の壮大な教育運動が各市町村に生み育てられている中、この町にも校区に教育子育て協議会が発足した。子どもは町の宝。子どもたちの現実や課題を明るく交流し、教育と子育ての充実をめざし、手をたずさえていく運動に、養護教諭の存在は大きい。

体のことは今だ、今やらなければ間に合わない、そんな思いを秘めながらも、保護者と共に一緒にやろう、手伝うよというスタンスが、何とも頼もしい。木○○さんの笑顔あふれる報告の姿は、参加者をも眠りから目覚めさせた。

子どもから時代を知り、そこからの矛盾と問題解決への取り組みが、多くの地域の人々と共に手をつなぐことへの道筋として示されたことは大きい。

3 癒し…育み…繋がる…保健だより

平○小学校 国○ ○○み

子どもは弱者である。子どもの成長発達に真摯に寄りそいあなたはステキなんだ、かけがえのない存在なのだ、といい続ける国○さん。

何度も使われた「保健室的まなざし」。この真意を問うにふさわしい子どもを見る目と、子どもに関わる多くの大人たちに心寄せる思いの深さに、参加者は心洗われ、感動の涙を流した。

国○さんは、この地域で子ども時代を過ごした。ゆたかな自然と心優しい地域のおばさんおじさんに囲まれて育った自分を映し出すし、この町は子どもたちが育つ環境になっているのだろうかと自問する。

そんな中から、「学校は子どもたちのステキさであふれている」「学校を支える大人たちは心から子どもたちを愛している」、そんなステキさや優しさを見つけ出し、保健だよりを通して保護者・教職員に心を込めて伝え続けている。

保健だよりに寄せる思いを、「癒し」生きる喜びを鼓舞すること、「育み」賢く体や生活を創る力をつけること、「繋がる」人と共に生きる喜びと安心感を築くこととし、その

意味合いを表現した。

子ども向けの保健だよりには、特に子どもへの励ましを大切にしている。毎日の生活の中の健気さや頑張り、下級生との温かな交流等を実名で載せ「いいよ、大丈夫・好きだよ・素晴らしい等」、子どもに関わる一人の大人としてのメッセージを送る。

自己否定から出る気がかりな行為に心揺らせながらも、自分が大事、あなたのもっている力を存分に出していいのだよと、支える。それは、いまの子どもたちを元気にしたいから。

また、保護者・教師向けの保健だよりを、教育と子育て・その思いを繋ぐ架け橋にしたいという。単に理解や協力だけではなく、みんなで育てているという共同の意識を生んでいきたいと思うから。

子育てが辛い時代でもある今だから、子どもの輝きや温かな交流を知る大人は元気になっていき、やがて子育てや教育へのロマンを呼び起こすのでは、とも思う。

最近、保護者たちが保健だよりを話題にしてくれる。やんちゃ坊主のレッテルを貼られていそうな我が子を、学校はこんなにもいいねいに存在を見、温かな目で支えてくれる。国○さんに、そう話した母の目は保健室的なまなざしだ。

資料として準備された保健だよりは、養護教諭としての願いがたくさんちりばめられ、国〇さんの人柄と感性に触れる物だった。

三 全体討議から

木〇〇さんの願いの大きさが、きめ細かな取り組みを生み出した。その確実に積み上げられていく過程から、養護教諭ならではのやりがいのある楽しい仕事として、実態・分析・課題の思考経路をたどっている。

この取り組みを通して、子どもたちはもちろん、教職員・保護者・地域の人々に支えられている養護教諭としての自分の発見が、今後の取り組みをつくり出していくと予感した。

木〇〇さんから、養護教諭にはいつでもどこでも学校保健の風をつくり出すパワーが潜んでいることに気付かされた。

国〇さんの保護者の深い胸の内にある子育ての共通の願いを、保健室的まなざしで受けとめ、子どもの育ちを心底から支えていくパートナーとして繋がる、というぶれない視点が改めて養護教諭という仕事への意欲を生み出した。

社会から見ると学校は見えにくいところ。保健室はもつ

と見えにくいところ。見える学校・可視化するということは、繋いでいくという意味だとおさえる国〇さん。

その意味で、保健室の営みや子どもの日々ちりばめられた素晴らしさのカケラに見え隠れする願いや思いを見える形で発信する。その通信の力は、やがて学校全体への理解・信頼に繋がっていく。

発言は書きつづることへの興味や再認識と併せ、今の学校で何かを活用できないかという視点での広がりをつくり、ホームページ等の具体的な見直しへの意見も出た。

大〇〇さんの、生きづらさを抱えている子どもたちの側から学校を見つめる視点は、まさに保健室的まなざしである。

その子どもたちを含めて全校の子どもたちが安心できる、学びを共有できる空間としての学校づくりの願いを受けとめながら、討議は子どもを丸ごとつかむ養護教諭としての力量を高めていくための集団的な学習の場になった。

一人ひとりを大切にすること、その子の存在する集団を大切にすること。子ども同士の関わりがあつて初めて人は育ちあう。家族も同じだ。

でも今保健室では、家族が存続していない姿を見る。家族に頼らなければ、教育を受けていくことのできない今の社会のあり方への怒りを抑えながら、「学校に来るだけで

もいい」と苦しみながらも、保健室的まなざしで子どもたちを支える若き養護教諭たち。

延べ一四名での二日間にわたる討議を通して、一人ひとりの養護教諭としての願いと養護教諭という職種の創造性に触れることができたことは、最高の収穫ではなかったかと思う。

学校で学ぶということは、他者と共に生きる・学ぶその喜びである。共に学び、育ち、遊びあえる子どもたち・青年たちを育みたいと話す参加者。やもするとその願いで、押しつぶされそうになったり、ジレンマを感じたりと、日々の忙しさでストレスが慢性化していることも事実ではあるが、同じ養護教諭として、互いの率直な意見や取り組み・その思いを見聞きする中で、この場がしだいに自分自身の自己肯定感を得る空間になっていったことも明記したい。

四 おわりに

二日目の午後から武〇さんが資料持参で参加した。資料は昨年度の経営計画、ピア・サポート研修会内容といじめ対策マニュアル。

午前は落ちついたおだやかな討論ではあったが、子どもたち・青年たちの抱える生きづらさとその深刻さも同時に

露呈することとなり、精神的には少々キツイ時間でもあった。

武〇さんはそんな疲れを一掃してくれた。自分の生活や体験をふり返る「体験ビンゴ」という全員参加のおもしろいゲームをしてくれた。しかも賞品まで用意してくれた。楽しい事実の共有、しかも保健室的まなざしに大切な、呼吸を合わせる力を瞬間につくり出してくれたことに深く感謝したい。

ここ数年参加の笹〇さんの、「ここに来ると、また頑張ることが出来る。」という柔らかな発言を、参加者は自らの心に映し出し、心開く語り合いの持つ強さを実感したはずだ。

(砂川市豊沼小学校)